

平成 12 年度千葉県立中央博物館特別展記念公開シンポジウムの記録

ロシアからの渡り鳥（冬鳥たちの世界）

平成 12 年度千葉県立中央博物館特別展「知られざる極東ロシアの自然—ヒグマ・シベリアトラの大地を旅する—」記念公開シンポジウム「ロシアからの渡り鳥（冬鳥たちの世界）」が 2000 年 11 月 18 日に中央博物館講堂で行われた。このシンポジウムでは、はじめに、主催者から開催の主旨として、特別展とこの記念公開シンポジウムの関係について説明があった。その後、6 名の講演者によって発表が行なわれ、最後に全体討論を行なった。133 名の方が参加され、活発な討論が行なわれた。シンポジウム後、職員による特別展の解説が行なわれた。

プログラム

進行：箕輪義隆（日本鳥類保護連盟）

コーディネーター：箕輪多津男（日本鳥類保護連盟）

はじめに (11:00-11:10)

倉西良一（千葉県立中央博物館）

アジサシ・ペーパー・クラフト (11:10-11:20)

清田義昭（千葉市動物公園）・桑原和之（千葉県立中央博物館）

冬鳥たちの生態 (11:20-11:35)

桑原和之（千葉県立中央博物館）・箕輪義隆（日本鳥類保護連盟）・高木 武（水鳥研究会）

トモエガモの越冬生態 (11:35-11:50)

山本浩伸（鴨池観察館友の会）・大畑孝二（日本野鳥の会サントクチャーリーセンター）・桑原和之（千葉県立中央博物館）

休憩 (11:50-13:00)

シギ・チドリたちの生態 (13:00-13:30)

桑原和之（千葉県立中央博物館）

ハマシギの分布 (13:30-14:00)

茂田良光（山階鳥類研究所）

水辺の鳥の保護—アジア太平洋地域の国際的な渡り性水鳥保護の取り組みの現状と将来— (14:00-14:30)

東梅貞義（WWF ジャパン自然保護室）

全体討論 (14:30-15:00)

講演要旨

はじめに

倉西良一（千葉県立中央博物館）

このシンポジウムは、平成 12 年度千葉県立中央博物館特別展「知られざる極東ロシアの自然—ヒグマ・シベリアトラの大地を旅する—」を記念して、ロシアから渡ってくる鳥たちの生態や保護をテーマとし、公開シンポジウムとして企画されたものです。まず、展

示会のいきさつなどを簡単に紹介します。

千葉県立中央博物館は、1996・1997 年の夏にロシア連邦のカムチャツカ半島や北千島の生物相をロシア科学アカデミーの研究者たちと共同で調査しました。カムチャツカ半島や北千島の生物相は、日本や東アジアの生物相を考えると、重要な場所です。しかし、長い東西冷戦構造の中で最近まで閉ざされた地域でした。日本の中でカムチャツカ半島や北千島の生物相に関する資料を直接、研究できる機会は、きわめて限られていました。

私は、高校生時代、高山蝶に強い憧れを持っていて、友人とともに北海道にチョウを探しに出かけました。真夏にも雪渓を残す大雪山の自然は、大阪の高校生には強烈な印象でした。私は、ただちに北海道の大学に進学することを決め、大学に進学してからも、北海道につながる北の地域の自然に強い興味を持ってきました。そしていつか自分でも、サハリン、千島列島、カムチャツカ半島に行って昆虫の調査をしたいと思っていました。しかし当時の情勢では、たとえ研究が目的だとしても、すぐに実現するとは思いませんでした。

1980 年代の終わりから 90 年代の前半に、世界の枠組みを変える大きな動きがありました。社会情勢の変化にともない、ロシアの研究者との交流も飛躍的に増加しました。電子メールの普及も、私たちの交流を強く押し進めてくれました。1994 年には、以前から交流のあったロシアの研究者たちと千島列島のトビケラ類に関する論文をまとめる機会があり、特に親くなりました。千葉県立中央博物館でも、南方の生物に関する大きな 2 つの研究プロジェクトが終了したので、3 番目のプロジェクトとして北の自然との関係をテーマにした研究を始めることになり、2 年間の準備期間を経て 1996・1997 年にカムチャツカ半島や北千島の調査を実現できました。“寒い夏”，“襲いかかる蚊の大群”，“いたるところにあるヒグマの足跡”など、語りきれない困難を克服しての調査でした。得られた成果を中心に、北の自然と私たちのつながりを見ていた

だきたいと考え、今回の特別展を企画しました。

今回のシンポジウムでは、特に渡り鳥の生態をみなさんにご紹介したいと考えています。というのも日本に冬、渡ってくる鳥達の多くは、シベリアやカムチャツカなど、ロシアから飛来するのです。この冬鳥たちを研究した成果を湿地や生息環境の保全とあわせ論議して頂ければと思います。

アジサシ・ペーパー・クラフト

清田義昭（千葉県動物公園）

桑原和之（千葉県立中央博物館）

アジサシは、ロシアなどで繁殖し、南半球の海岸で越冬します。千葉県では、アジサシは、春と秋の渡りの時期にみられる渡り鳥です。東京湾ではまれに繁殖することもあります。その多くが旅鳥です。東京湾では、木更津市から浦安市にかけての地域で数千から数万羽がみられることがあります。今回の特別展知られざる極東ロシアの自然－ヒグマ・シベリアトラの大地を旅する－で展示しているペーパークラフトのアジサシは、博物館の収蔵標本や写真を参考にし、実物と同じ大きさで作成しました。お配りいたしましたクラフトの原図からクラフトができますが、ゆっくり作って完成までに約 4 時間かかります。

冬鳥たちの生態

桑原和之（千葉県立中央博物館）

箕輪義隆（日本鳥類保護連盟）

高木 武（水鳥研究会）

水鳥の多くは、繁殖地から越冬地へと長距離を渡ります。日本で越冬する水鳥の多くは、ロシアで繁殖します。そして、繁殖地であるロシアから日本に渡ってきます。日本で冬を越す渡り鳥のことを冬鳥とよんでいます。日本には、ガンやカモの仲間、カモメの仲間やシギ・チドリの仲間の多くがロシアから冬鳥として飛来します。これらの鳥たちは、環境の変化で減少してしまいました。

ユリカモメやセグロカモメなどロシアで繁殖し、日本で越冬するカモメの仲間の多くは、ここ近年個体数が増加しています。そのなかでも減少しているカモメもいます。極東地方でも数が少ない種の代表がヒメクビワカモメ *Rhodostethia rosea* とアカアシミツユビカモメ *Rissa brevirostris* です。稀少種であるアカアシミツユビカモメは、ミツユビカモメより一回り小さく、翼の上面の青灰色が濃く、脚は鮮やかな赤色です。ベーリング海のプリピロフ諸島・コマンドル諸島・アリューシャン列島等の一部の島々でしか繁殖していません。繁殖期の後もあまり南下せず、ベーリング海周辺からアラスカ湾にかけての北太平洋で越冬します。

日本国内では、極めて稀な冬鳥で、利根川河口、北海道落石岬、根室などでしか記録がありません。

ヒメクビワカモメは、東京湾にも現れました。夏羽では頭部と尾が白く、後頸から喉にかけて黒色の羽毛があり、首輪状にみえ、嘴は黒く小さく脚は赤く、たいへん奇麗な鳥です。分布域は狭く、ロシアのタミル半島南部からコリマ川下流域にかけてのシベリア北東部が、主な繁殖地です。繁殖つがい数は、全世界で 10,000～25,000 の間と推察されています。繁殖地から冬季もあまり南下せず、北極海や北太平洋の流水原の周辺周辺で越冬すると考えられています。日本では、北海道東部にごく少数が稀な冬鳥として渡来するだけです。東京湾では 1999～2000 年の越冬記録が初認で、習志野市谷津干潟、三番瀬、小櫃川河口（2000 年 3 月 5 日、1 羽、熊谷 貴、私信）などでみられ、九十九里海岸、利根川河口などでも観察されました。

陸域で生活する鳥たちだけではなく、海で生活する鳥たちにもいろいろな脅威があります。ウミズメやカモメたちも刺し網、流し網などによる混獲やレジンペレットなど海洋汚染による影響を受けやすいようです。重油流出による被害は、海に飛来する鳥たちにも影響を及ぼします。ナホトカ号重油流出事故などの実例もその代表例です。

1997 年 1 月 2 日、島根県沖でロシア船籍タンカー「ナホトカ号」が沈没しました。そして、「ナホトカ号」から流出した重油は、海を漂流し、日本海沿岸各地の海岸に油塊が漂着してしまいました。1 月 7 日、山陰地方で重油に汚れたカモメの仲間が最初に確認され、ニュースで報道されました。さらに、重油は、ウトウやウミズメなどの鳥たちを汚染してしまったのです。重油の汚染により保護されたり、死体として拾われたりした水鳥は 1,311 羽にもおよびました。この被害は国内での状況です。重油の汚染によりロシアから飛来する鳥たちも無関係ではありません。

ロシアから飛来するエトピリカは、全長が約 40～44 cm で、チドリ目ウミズメ科に属します。雌雄で羽の色にあまり変わりはありません。脚は体の後方についているので、地面にいるときは、直立している様に見えます。国内では、北海道沿岸の離島で集団で繁殖していましたが、近年減少が著しく、現在は数が少なくなりました。エトピリカは、北太平洋、北大西洋に広く分布しています。日本周辺ではサハリン、千島列島、カムチャッカ半島で繁殖し、冬期はサハリンや千島列島から南下し、北海道南部から東北、北陸地方の海上で越冬します。冬期は繁殖地より南の海上に移動しますので、海上で観察される多くがロシアから飛来したと考えられます。

エトピリカは、離島などの断崖の岩棚に集団で繁殖し、地上に直接巣を作ります。1 卵しか産みませんので、個体数が減少してしまうと、回復するのに時間が

かかります。渡り鳥たちを保護するには、日本だけで保護を考えていても無意味な場合が多いのです。

トモエガモの越冬生態

山本浩伸（鴨池観察友会の会）

大畑孝二（日本野鳥の会サンクチュアリーセンター）

桑原和之（千葉県立中央博物館）

一般的にカモ類は、日中は安全な湖沼などで休息し、日没後に採食のために水田などに向かうとされています。カモ類の保全のためには、日中の休息場所、夜間の採食場所の両方を保全していく必要があります。日中の休息場所に関しては、1969 年以降毎年行なわれている「ガンカモ科鳥類の生息状況調査（環境庁）」や、野鳥観察者の観察記録からわかってきました。その記録は、保護区の設定やラムサール条約登録時の根拠とされるなど活用されています。今回は、東アジアにだけ分布する稀少種のトモエガモ *Anas formosa* に関する報告をいたします。

トモエガモは、シベリア極東部などで繁殖し、韓国や日本などで越冬します（黒田, 1980; del Hoyo *et al.*, 1992; Miyabayashi and Mundkur, 1999）。韓国では、トモエガモの大規模な群れが観察されています（Kang and Cho, 1996; 金井, 2000; Pitches, 2000）。日本国内では減少して個体数が少ない種になってしまいました。たとえば、石川県加賀市片野鴨池（以下、片野鴨池）に 1 万羽以上飛来していたトモエガモは、近年では多くても 1,000 羽程度しか観察されていません（矢田, 1975; 石川県, 1977, 1998; 日本野鳥の会, 1995, 1999）。トモエガモの越冬数は約 1,100 羽とされています。繁殖地においても個体数は減少しているようなのです。分布が局所的であり、現在、日本では、日本海沿岸などに越冬個体群が集中しています。トモエガモの情報は少なく、全国的に公表されるトモエガモの飛来状況に関する情報は、現在のところ全国一斉に行なわれているガンカモ科鳥類の生息調査（以下、一斉調査）による情報しかないといえます。そこで、片野鴨池でトモエガモの調査を行なうことにしました。

片野鴨池は、北陸以西ではもっとも多くのマガン、ヒシクイが越冬するとともにマガモをはじめ、全国的に個体数の少ないトモエガモなどカモ類の飛来する国内有数の水鳥渡来地です。しかし、近年、鴨池を越冬地として利用するカモ類の個体数は減少しています。その原因として、周辺の都市化などによる採食環境の悪化などが考えられています。ただし、カモ類の採食は夜間に行われることが多いため、採食場所を特定することができませんでした。そこで、片野鴨池で越冬するカモ類を対象に、電波発信器をもちいて採食場所を探しました。1999 年 12 月 12 日から 2000 年 2 月

3 日にかけてトモエガモのほかマガモ、コガモ、ハシビロガモの合計 15 羽を捕獲し、追跡をしました。追跡の結果、カモ類の採食場所は片野鴨池周辺で確認されました。片野鴨池から半径 10 km 前後の水田がカモ類の採食場所であることが確認されました。

カモの仲間は水辺の生活に適応し特殊化したグループで、嘴が広く、脚にはみずかきがあるなどの特徴があり我々に最も身近な水辺の冬鳥といえます。日本で越冬するガンやカモの仲間は多く、記録されたガンやカモは約 52 種です。カルガモやオシドリなど国内で繁殖する種もいますが、そのほとんどは東および極東シベリアのツンドラからタイガ地帯にかけて繁殖します。鳥類標識調査結果（バンディング）から、多くの種がロシアのウスリーからカムチャッカで繁殖した後、日本に渡ってきて、越冬する冬鳥であることがわかってきました。今後は、トモエガモで行ってきた調査を他の種でも行っていきたいと考えています。

シギ・チドリたちの生態

桑原和之（千葉県立中央博物館）

千葉県の鳥類相の大きな特徴は、夏鳥が少なく、冬鳥や旅鳥が多いことです。その冬鳥や旅鳥は、海岸や河川などの水辺に多く見られます。冬鳥として、ロシアなどの極東地域から多くのシギ・チドリ類が飛来します。あまり知られていませんが、千葉県内にはシギ・チドリ類の重要渡来地が多いのです。九十九里浜海岸、外房海岸、利根川河口から長崎海岸ではシギ・チドリ類の個体数が大変多いのです。以下では、太平洋に面した外房海岸におけるシギ・チドリ類重要渡来地について紹介いたします。

砂浜海岸は、シギ・チドリ類の重要渡来地です。特に九十九里浜海岸は、20,000 羽以上の水鳥が飛来します。砂浜には、シギ・チドリ類の餌となる底生動物が多く、春と秋の渡りの期間および越冬期には多くのシギ・チドリ類が渡りの中継地として砂浜海岸を利用します。キアシシギ、シロチドリ、メダイチドリ、トウネンやチュウシャクシギなどが砂浜でみられます。シギ・チドリ類がみられる期間は渡りの季節だけではなく、越冬期には、ミユビシギやハマシギなどが、砂浜で採食しています。ミユビシギは砂浜に多いのですが、砂浜の後背地である内陸の水田地帯にも、キアシシギ、チュウシャクシギ、キョウジョシギが多く、水田地帯の造成地ではツバメチドリの繁殖とムナグロの越夏などが確認されています。

外房海岸の干潟にもシギ・チドリ類は多く見られます。外房海岸に流入する河川には干潟が形成されます。一宮川・夷隅川河口は、その代表的な干潟です。一宮川河口は、シギ・チドリ類だけではなく水鳥の重要な生息場所でしたが、湖沼や干潟に隣接した塩生湿

地が消失したため、シギ・チドリ類の個体数はかなり減少しました。一宮川河口では、キリアイの群れや、世界的にみても個体数が少ないヘラシギが定期的に見られていたのですが、現在はほとんどみられません。夷隅川河口では、シロチドリやメダイチドリが多く、ミヤコドリなどが越冬していましたが、近年、個体数や種数は減少しました。極めて良い干潟が保存されていたのですが、粗大ゴミなどの流入や堆積が著しく、環境が悪くなりました。

利根川河口から長崎海岸にもシギ・チドリ類がみられます。銚子市周辺の海岸、利根川河口から長崎海岸や外房海岸の岩礁海岸では、干潟ではみられないメリケンキアシシギ、チュウシャクシギ、キョウジョシギなどのシギ・チドリ類が春や秋の渡りの時期にみられます。岩礁地帯では、キアシシギ、メリケンキアシシギ、チュウシャクシギ、キョウジョシギなどが採食するだけでなく、岩礁で畔をとることもあります。この岩礁地帯では釣りなどのレジャーで採食が攪乱されます。メリケンキアシシギは、岩礁地帯や干潟で採食していたのですが、釣り人やシジミ採りの影響を受け、減少していると考えられます。

国際的な湿地の保護が、減少する水鳥類の保護のためにも考えられるようになりました。通称ラムサール条約、正式名称を「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という条約では、地球規模で自然資源の保全を目指しています。この条約の目的は、開発の脅威にさらされている湿地を保護することです。水鳥たちを守るには、繁殖地である湿地と越冬地を保護し、渡りのルートでの生息地を確保する必要があります。渡り鳥たちを守るためには、国際間の協力が必要なのです。ただし、旅鳥や冬鳥の種ごとの渡りのルートは調べられていません。ロシアから渡ってくる種で生態が詳しくわかっていない種はほとんどいないといえるのです。渡り鳥を効果的に保護するためにも、渡り鳥の生態調査が必要になってくるといえます。

ハマシギの分布

茂田良光（山階鳥類研究所）

ハマシギ *Calidris alpina* は、1980 年代まではシギ・チドリ類では日本で越冬する最も普通の種でした。シギ・チドリ類の中では、個体数も多かったのですが、近年、日本国内に渡来する個体数は著しく減少しました。図 1 にハマシギの分布を繁殖および越冬分布で示しました。ハマシギの分布は広く、旧北区と新北区の極地方を含む高緯度地域で繁殖し、非繁殖期には南方に渡り越冬します。ただし、赤道を越えて南半球まで渡るものはほとんどいないようです。ハマシギはシギ・チドリ類の中では最も亜種数が多く、約 10

亜種に分けられ、各亜種の繁殖地と越冬地についての正確な分布については明らかではなく、とくに各亜種の越冬地については冬の亜種の識別が難しいため、各亜種の繁殖地の分布よりも、いっそう正確には把握されていません。図 1 の越冬分布には、亜種は図示されていません。それはそういった理由があるのです。どうしてハマシギには亜種が多いのか、理由はよく判っていませんが、現在、知られている各亜種のおよその繁殖および越冬分布域は、以下の通りです (del Hoyo et al., 1996; Dement'ev and Gladkov, 1951)。

1. *C. a. arctica* 繁殖地：グリーンランド北東部；越冬地：主にアフリカ北西部
2. *C. a. schinzii* 繁殖地：グリーンランド南東部、アイスランド、フェロース諸島、イギリス諸島北部、バルト海沿岸、スカンジナビア南部；越冬地：ヨーロッパ南部、アフリカ北西部
3. *C. a. alpina* 繁殖地：スカンジナビア北部、ロシア北西部；越冬地：ヨーロッパ西部、地中海沿岸、インド北西部
4. *C. a. centralis* 繁殖地：エニセイ川河口から東はコリマ川までのロシア北部；越冬地：インド北西部、バングラデシュ、中国南西部
5. *C. a. sakhalina* 繁殖地：コリマ川からチュコト半島、アナディリ；越冬地：中国東部、韓国、日本、台湾、およびアラスカ北西部にも少数が渡るとされている。
6. *C. a. actites* 繁殖地：サハリン北部；越冬地：不明
7. *C. a. kistchinski* 繁殖地：オホーツク海北部沿岸、コリャーク山、カムチャッカ、千島列島北部；越冬地：不明
8. *C. a. arctica* 繁殖地：アラスカ北西部、カナダ北西部；越冬地：中国東部、韓国、日本
9. *C. a. pacifica* 繁殖地：アラスカ南西部；越冬地：アメリカ合衆国西部沿岸、メキシコ西部沿岸
10. *C. a. hudsonia* 繁殖地：カナダ中部；越冬地：アメリカ合衆国南東部沿岸、メキシコ東部

アラスカでは、1999 年の夏から日米共同で生態調査が進められています。日本に渡来するハマシギを保護するためには、ロシアのハマシギについても繁殖地において調査の実施をする必要があると思います。特にシベリア東部とチュコト半島で繁殖するハマシギの亜種 *C. a. sakhalina*、カムチャツカ半島とオホーツク海沿岸および北千島で繁殖する亜種 *C. a. kistchinski*、およびサハリン北部で繁殖する亜種 *C. a. actites* について調査の実施が望まれます。上述のように、亜種 *C. a. sakhalina* は一部が北アメリカ西部に渡り越冬するとされており、また、亜種 *C. a. kistchinski* と亜種 *C. a. actites* の両亜種は越冬地が不明のままなのです。従来、日本からのハマシギの記録は亜種 *C. a. sakhalina*

だけであるとされていますが（日本鳥学会目録編集委員会, 1997）, アラスカ北西部とカナダ北西部の亜種 *C. a. arcticola* も、日本で越冬または日本を通過することが、標識調査から知られています。また、サハリン北部の亜種 *C. a. actites*, およびオホーツク海北部沿岸とカムチャツカ、北千島にかけての亜種 *C. a. kischinski* も両亜種の繁殖分布域から日本を通過するか、日本で越冬する可能性があると考えられるのです。さらに、アラスカ南西部の亜種 *C. a. pacifica* も亜種 *C. a. pacifica* の繁殖地であるユーコンデルタの集結地で、亜種 *C. a. arcticola* と合流し、亜種 *C. a. arcticola* とともに日本に渡来する可能性もあるといえます。普通種と考えられてきたハマシギにもこれだけ解決しなければならない問題点があるのです。

さて、減少の原因を解明するために、繁殖地と越冬地、および渡りの中継地と経路を調査することが、本種の保護のために重要なことは明白です。各亜種の繁殖および越冬分布と生息環境、渡りの経路、各亜種の個体数と生態の調査も必要です。また、ハマシギの亜種分化については今後の研究が必要であり、亜種数についても将来の検討が必要です。さらに、各亜種の識別についても、夏羽、冬羽、幼羽など形態学的な研究とともに個体群の遺伝的特性を明らかにするため、捕獲時に採血や羽毛の採取による DNA サンプルの収集と解析などの生化学的な研究も望まれます。

水辺の鳥の保護

—アジア太平洋地域の国際的な渡り性水鳥保護の取り組みの現状と将来—

東梅貞義（WWF ジャパン自然保護室）

日本で見られる多くの水鳥は渡りをします。日本では、約 76 種のシギ・チドリ類が記録されていますが、そのうちの 90% が大きな移動をする渡り鳥です。ですから、国境を越えて移動する渡り鳥の保護には、国と国との国際的な協力が欠かせないといえます。

まず、国際的な渡り鳥を保護する制度、ネットワーク型渡り鳥保護の始まりと発展について話しましょう。これまでにも、2 カ国間の渡り鳥保護条約はありました。例えば 1972 年に、日米間で渡り鳥保護条約が締結されています。また、渡り鳥の生息地である湿地を国際的に登録するラムサール条約も 1971 年に発足し、日本は 1980 年に加盟しました。しかしながら、日本を始めアジア各国で、開発により渡り鳥の生息地が大規模に消失し、さらに減少しつつあります。こういった背景から保全の取り組みの強化を求める声が強

なっていました。1995 年、日本政府とオーストラリア政府が呼びかけ、アジア太平洋地域で渡りを行う水鳥（渡り性水鳥）の保全のあり方を話し合う国際的なワークショップが開かれました。この場で新たに多国間で渡り性水鳥の保全の枠組みを作成することが国際的に合意され、これをきっかけとし、重要な渡り鳥の渡来地をつなぐ、ネットワーク型の保全活動が始まったのです。

1996 年にシギ・チドリ類を対象とした「東アジアオーストラリア地域シギ・チドリ類渡来地ネットワーク」が発足しました。当初参加（登録）したのは、7 カ国 19 カ所でした。日本からは、千葉県習志野市の谷津干潟と徳島県吉野川河口の 2 カ所が参加しました。その後日本からは沖縄県漫湖と東京都東京港野鳥公園が参加し、2000 年 9 月現在、全体では参加地は 9 カ国 26 カ所に増えました。さらに 1997 年にツル類を対象とした「東アジア地域ツル類重要湿地ネットワーク」が発足しました。このネットワークでは、6 カ国、18 カ所の参加がありました。1999 年には、ガンカモ類、ハクチョウ類を対象とした「東アジアガンカモ類重要生息地ネットワーク」が発足し、6 カ国、25 カ所の参加を得ています。

これらネットワークに参加するための条件は、2 つあります。まず、決められた基準数以上の渡り性水鳥の生息地であること。もう一つは、生息地のある自治体が参加に同意することです。これまで渡り鳥保護のためには、国内の法律に基づき国設鳥獣保護区の指定が行われていました。これは、ラムサール条約登録の前提条件でもあったのです。渡来地ネットワークがユニークな点は、参加の際、その国の法律による保護区指定を前提としていないことです。これは国際的に登録することにより、地元の人々の渡来地に対する重要性の認識を高め、結果として保全が進むことを狙っているためです。

また、参加手続きが完了した後も、地元への啓発活動を継続することが推奨されています。例えば谷津干潟がある習志野市は、市内の小学校に呼びかけ、トウネンのバードカービングを作成し、共同で 1999 年 6 月にシギ・チドリのネットワークの参加地 25 カ所に送りました。今後はシギ・チドリ類の観察情報を、各国の渡来地周辺の学校と交換する計画を立てています。このようにネットワーク型の渡り鳥保全活動は、国の行政だけが行うのではなく、自治体、地域の NGO や学校等が協力しながら発展していることが強く期待されているのです。